
夕空に啼く鳥

Shade Raven

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕空に啼く烏

【Nコード】

N0416W

【作者名】

Shade Raven

【あらすじ】

噂話は現実をも歪める……アル田舎町で急速に広がった妙な噂話もとい怪談話。その正体とは……！

■アットノベルスと同時連載

■ジャンルはファンタジーよりのホラーモノでしょうか……。分からないのでその他。にして置きます

序章 「鳥啼く声のナニに怯えるか」 ?

カラスの鳴き声が聞こえた気がした。

ふと、立ち止まり、空を見る。しかし、そこには何もいない。ただ夕方の赤い空があるだけだ。

直、陽は沈む。完全に暗くなる前に、家に帰らなくては。

私は再び、歩き出した。今立ち止まっていた時間も、無駄。

赤い空は、だんだんと群青色へと塗りつぶされていく。私は歩調を速めた。

田んぼに囲まれたあぜ道を、駆ける。

急ぐのにはわけがあった。別に、中学生である私が、家に帰るのが遅くなったら親に怒られるというわけでも無く、家に帰ってから用事があるというわけでもない。ただ、「あの噂話」を聞いてしまったから。

噂話というものは、どうも信憑性の低いものほど、早く広い範囲に伝わるらしい。そんなわけで、この噂話も隣の町から私の住むこの町へと伝わってきたのだろう。息が切れるが気にせず走る。

私はとにかく怖がりだ。とは言え、ちょっとした暗闇程度なら平気。しかし、そこに何か「怖い話」がプラスされるともうたまらない。

視界に何件かの家が見えた。もう少し。

その噂話いや、怪談といったほうがいいか。どこにでもあるような使い古されたネタ。それに、地元限定の設定を加えたもの。だからこそ、誰も信じず、だからこそ、怖い。

——田んぼに囲まれた路^{みち}。夕が終わり、夜へと移り変わる時間。そのある一時。その時間はほんの数秒に過ぎない。辺りの景色が一

変する。完全なる闇がそこに訪れる。しかし、そこに感情を抱いてはいけない。恐怖すらも。疑問すらも。感情を抱いた瞬間、あなたは闇に取り込まれる。そこは異界。現世でも、あの世でもない世界

――
闇はすぐそこにまで迫っていた。

逃げなきゃ……。

ナニから……？

怖い。

ナニが？

ふと、眼前に妙な光景が映る。

カラス。幾羽ものカラスがそこにいて、しきりに嘴を動かしている。

あれは……ナニ？

――何故か、あるものが頭の中に浮かんだ。嘴を動かして、ナニを啄ばんでいるのか……。

私はしきりに首をふって、その考えを振り払う。いくらなんでも、そんな話はベタ過ぎる。

目を凝らす。

カラスが啄ばんでいたのは生ゴミの入ったゴミ袋だった。私は安心し、前へと進む。

――と、そこでカラスたちが、その光る眼で私を睨んだ。
「なん、なの……」

じつと、睨んでくる。私はつい、あとずさってしまった。

あれ……。私じゃない。

カラスたちは、私を睨んでいるわけではなかった。見ていたのは私の影だった。

私の影を睨んでいた。

私も、つい視線を下ろし、自分の影を見ようとしてしまう。

薄い。違う。闇に溶けている――！

はっとなり辺りを見る。

そこには、闇が降りていた。どこまでも続く、果てのない闇。どこを見ようと、黒――否、無だ。

夜でもこんなに暗くはならない。民家の灯りは遠いとはいえ、街灯がいくつかある。

ただ、怖いと思ってしまった。

どうやら、人間の思考はありえないことに遭遇すると、壊れてしまつらしい。何も考えられない。いや、考え始める事が出来ない。

私はただ、そこに立ち尽くして――

序章 「烏啼く声のナニに怯えるか」 ？

「ユカ、話し聞いてる？」

私は自分の名前を呼ばれてはつとなつた。見ると、目の前には親友のユウナがいた。

何か、違和感を感じた。

ユウナに気付かれないように、目だけで辺りを見る。

学校。自分の席。

時計は昼休みの時間を示していた。

「えっと、何の話をしてたんだっけ」

「やっぱ、聞いてなかったの？ もう、どうしたの。さっきからボ―っとして。夏バテ？」

「え……いや、うん。そうかもね」

私は適当にはぐらかして、作り笑いをする。

確かに、自分は今ボ―っとしていたらしい。しかし、意識が飛ぶほどボ―っとしたのは初めてだ。いくら、今年の夏が例年より暑いからとはいえ……。熱中症だろうか……。

何だろう。何かがおかしい気がする。しかし、ユウナの言葉でその違和感はすぐに意識の底へ落ちて行つた。

「じゃあ、もう一回最初から話すね」

「あ、うん。お願い」

窓の外では、しきりに烏が啼いていた。

「最近ね、隣町の子から面白い話を聞いたんだ」

「へえ……」

隣町といつても、この町からは結構遠い。田舎なので仕方がないか……。しかし、ユウナにそんな遠くにも知り合いがいるとは、自称、顔が広いといつも言ってるだけはある。

「面白い話って言ったって、ユカには少しきついかもよ」

ユウナは茶化すように笑う。

私もそれに返すように顔をしかめて見せた。

「ナニがきついのか？私、大抵の話には乗れるんだから」

「そっか。じゃあ、話しても良いよね。『怖い話』」

ユウナは意図的に声のトーンを下げたようだった。私は、その「怖い話」という単語に小さく身を震わせる。この手の話は嫌いだ。

「ある日の夕方、一人の女の子が家に帰るために田んぼ道を走っていました。彼女にはどうしても、急がなくてはいけない事情があったのです」

息を呑む。

「それは、彼女がある『噂話』を聞いてしまったから」

前から知っていたが、ユウナの騙り方は上手い。トーン、間、スビード。人を惹きつけ、意識を完全に取り込む話術。

「その噂話というのは、何とも普通に馬鹿げたもの。だからこそ、得体の知れない恐怖が付きまとう」

「その噂話ってというのは……？」

ユウナは小さく晒う。

「……田んぼに囲まれた路。夕が終わり、夜へと移り変わる時間。そのある一時。その時間はほんの数秒に過ぎない。辺りの景色が一変する。完全なる闇がそこに訪れる。しかし、そこに感情を抱いてはいけない。恐怖すらも。疑問すらも。感情を抱いた瞬間、あなたは闇に取り込まれる。そこは異界。現世でも、あの世でもない世界」
そこで、ようやく気付いた。これは、過去だ。

——再び、暗転。

序章 「鳥啼く声のナニに怯えるか」 ?

私は目を覚ました。しかし寝たという記憶はない。

「よう、おはよう」

声が聞こえた。幼い、男の子のような声。

「ここは……」

私は辺りを見回す。

そこは白昼の、いつもの田んぼ道。そこに私は突っ立っていた。声はしたが、辺りには子供はない。その代わりに、カラスが一羽いた。まさか、と思いカラスをじっと見る。

しかし、当然の如くカラスは喋らない。さっきの声は、幻聴か。カラスはただ、黄色く光る眼でこちらを眺めているだけだ。

そこでやっと、自分が今までナニをしていたか、という思考に移ることが出来た。

思い出せたのは二つ。一つは家に帰ろうと走っている私の姿。もう一つは、教室で友人と話す私の姿。しかし、そのいずれもが曖昧で、時系列もあわない。

カラスはゆつくりと私に近づいた。

カラスは何をするわけでも無く、ただそこに佇んでいる。

何で私はここに立っているのだろう。

よく分からない。……とりあえず、家に帰ろう。

私は歩き出す。

「まだ、気付かないのか？」

ふと声が聞こえる。さっきの声。確かに、私の傍にいるカラスが喋った……ように見える。

なんなんだ、まったく。

「あなたが喋ったの？」

私は座り込み、ばかばかしいと思いながらも、カラスに話しかける。

「そうだ、話しているのは僕だ」

はあ、と私はため息を吐く。どうやら私は狂ってしまったらしい。カラスが喋るといふ幻聴とは……。

「おいおい、お前は正常だぞ？　あと、勘違いするな。喋っているのは僕であつて、このカラスじゃあない」

何を言っているのかまったく理解できない。それに、声は幼いの
に、何故か上から目線で、違和感を感じてしまう。

「あなたは、なんなの？」

私は、誰に訊くわけでも無く目の前のカラスに問う。

「僕？　僕はね、魔法使いさ」

「魔法使い……」

私はその言葉に眉をひそめる。

「そんなの、いるわけない」

「ま、そうなるよな。それが、普通の反応。でもな」

カラスは言葉を切る。そして、その黒い翼を広げた。

「お前が今置かれている状況は、非現実。それだけは理解しておけ。そうしなければ、一生抜け出せない」

カラスはそのまま、何処かへ飛び去っていつてしまった。

最後までナニを言っていたのかは理解できなかった。

まあ、どうせ幻聴。暑さで頭が惚けていただけだろう。これは、早く帰って休んだ方が良さそうだ。

私は家に向かって歩き始める。

序章 「烏啼く声のナニに怯えるか」

其処にあるのは循環。 擦れた環^わ。

その永遠循環^{無限ループ}に取り込まれたものは、認識せずには外れられない。

しかし、その環は擦れているが故に認識をずらす。 永遠に出れない完全なる空間の牢獄。

闇にも似た空間。 光がないわけではない。

ただ、認識をすることは難しい。 否、不可能だ。

なぜならその循環は「自己」なのだから。

第一章 「花咲く折にナニを思うか」 ？

「——それで、その女の子はどうなっちゃったの？」

あやずみくろえ

文墨玄恵は体を縮こませ、いすに座る僕を見上げるようにして見ていた。ちなみに、彼女は床に座っているので、もとより見上げないと僕は見れない。

「その子はね……」

言いかけて、切る。このままこの話の、僕の言おうとしていた続きを言ってしまうてもいい。しかし、それを言ったらなんだかつまらないような気がする。せっかく、文墨がこんなに怖がっているんだ。期待に添えるような内容に改造する事にしよう。

「その少女はね——」

ごくろ、と文墨が息を呑む音が聞こえてきそうだ。

しっかり間をおいて、と。

「二度と、家には帰らなかったんだよ」

言って、後悔した。自分のその普通べたな展開に自分で笑いそうになる。

即興だったとはいえ、このつまらなさ。僕のホラーの話をするセンスは皆無のようだ。

しかし、文墨はというと相当怖かったのか小さく震えている。

少し怖がつている程度なら、見ていて面白いのだが、怖がられると逆に心配にすらなってくる。……どこにそんなに怖くなる要素があったというのだろう。

「お、おい。大丈夫か……」

手をかけようとして——顔面に拳が飛んできた。クリティカルヒット！これ、鼻の骨折れてるんじゃないやね、と思うほど鼻が痛い。必死に鼻を押さえながら、文墨の方を見る。殴った犯人は、明らかにこいつ。文墨は半泣き状態だった。

「リュウ君、ひどい。私が怖い話嫌いなもの知っておきながら……」

はい、リュウ君こと蒼河隆希ですが、ひどいとは思いません。ていうか、怖い話嫌いなんて知らなかったし、この程度の話で怖がるのもおかしい話だ。そして、僕は何故殴られた？

「人、殴っておいてその言いようはない」

「……。ごめん、つい意図的に手が出ちゃって」

それ謝ってるつもりなのか。

「ところで」

もう、真顔に戻ってる文墨。

「本題に入ろうよ。何の理由も無く、女の子の話したわけじゃないんでしょ？」

「あ、ああ」

そう。理由もなしに、僕は「作り話」はしない。しかも、いま話した「少女が噂話にのみこまれる」という話は、百パーセントフィクションではない。言うなら八割フィクションの、残り二割はノンフィクションだ。

——少女は確かに存在し、「噂話」も同じ様に存在した。

「でも、本題つても、そんなに面白い内容じゃあないぞ」

「不謹慎なことじゃないで。仕事に面白いも何もないわ」

あーはいはい。そうですね。

いつも通りの、そんな台詞にうんざりしながらも、強引に話を進めようとした。

しかし、丁度そこで十二時になったことを示す時計のメロディが鳴った。

「あ、正午か。んじゃ、僕は昼飯食べるとするかな」

「ちよっ、まだ話し終わっていないどころか本題にも入ってないじゃない！」

「決まった時間に飯を食う、これ僕の健康法」

とりあえず、後ろで何か叫んでいる文墨を軽く無視し、僕はキッチンへと向かう。

冷蔵庫を開ける……が、見事に食材といえる食材がない。あるのは、ペットボトルに入ったお茶数本と、何故か大量のプリン。

何でこんなにプリンが？ あの人が来ているわけでもないのに珍しい。

とりあえず、冷蔵庫を閉め振り向いた。

「うっ」

すると、そこには文墨がいた。むしゃむしゃとココアスティックなる、ココアが練りこまれたパンを食べていた。

「何してんの、お前」

「見れば分かるじゃん。お昼ごはんだよ」

「……なんで立って食ってんの」

あー、いや突っ込む所はそこじゃなかった。

「確かに、立って食べるのは行儀悪いね」

文墨は口にパンを咥えたまま、キッチンの横にある、小さな部屋へ去っていった。

なんだったんだろう。さっきまで怒ってたのに、相も変わらず感情の切り替えが早い。

しかし、それもなれた。ここにその他二名合計四人で住み始めてもう一年がたつのか。

僕は棚においてあったカップめんを食べることにした。

T県の中心部に位置するこの町。僕たちが住んでいる家は、そんな町の端のほうにある。あるマンションの隣り合った二つの部屋の壁をぶち抜いて作った大きな部屋だ。その広さ、なんと8LDK。四人で住むのには十分すぎる広さだ。

僕は、昼食を終えると再び自分の部屋へと戻った。

小さな机の上においてある、ノートパソコンを開き、起動させる。表示されたデスクトップに並ぶ、大量のアイコンの中から一つを

選りダブルクリック。画面に、大きく写真が表示される。それは、田んぼに囲まれた風景。ある田舎の町のものだった。
この写真は、数日前僕のパソコンのメールアドレスへと送られてきた。

件名・たすけて

本文・なし

添付・0000.jpg

最初、ただの悪戯メールとも思った。しかし、添付されていた写真を見てその考えは八割ほど消えた。

何故なら――

「入っていいか？」

ふいにドアのノックの音とともに、声が聞こえた。

この声は……。

「いいよ。てかさ、何でお前がこの時間にいるわけ？」

入ってきたのは、身長百八十センチくらいの男。眼鏡をかけており、第一印象は秀才。そんな彼、西大路銀埜にしおおじぎんやはこの住人だ。

銀埜はすたすと、自分の指定席である僕のベッドに腰掛けた。

「なあ、だから、何でお前がいるんだ、って訊いてるんだけど」

「ん、ここに居ちゃおかしいか？　ここ、自宅じぶんちなんだけど」

「いや、そりゃそうだけどさ。お前、今日学校だろ」

銀埜は高校二年生。平日の真昼間に家に居るのは、普通不自然だ。

「学校ねえ……。飽きたから帰ってきたよ」

「……飽きたって。教師、怒るだろう」

「そんなわけない。いつものことじゃないか。お前も分かっている事をいちいち言うなよ」

……そう。認めたくはないが、これはいつものことなのだ。銀埜はいつも昼間には学校から帰ってくる。しかし、教師は当たり前

如く、怒って電話をかけてきたり、銀埜を停学にしたりすることはない。何故なら、銀埜は「超」がつくほどの秀才だからだ。本人曰く「東大なんか楽勝」らしく、学校側もその実力を認めいわゆる進学率稼ぎとして彼を特別待遇としているのだ。

「ちえっ。お前はいいよな、周りからの期待があつて」

嫌味っぽく言つたつもりだったが、銀埜は気にする風も無く、小さく笑つた。そして、僕の机のパソコンに目をやった。

「何か調べてるのか？」

銀埜は、極端に悪い目を細めるようにしてディスプレイを見つめる。しかし、どうやら細かくは見えていないようだ。

「ん、ああ。ちょっと調べ物」

僕は素早くマウスを操作し、開いていた画像のウィンドウを閉じる。

「なんだ？ そんなに慌てて消しちゃつて。お前、エロイ画像でも見てたんじゃねえのか？」

銀埜はニヤニヤと、いやな笑みを浮かべる。

「つバカ。なんなんじゃねえよ」

「じゃあ、なんだよ」

銀埜はベッドから勢いよく飛び降りると、僕につめよる。

僕はつい、小さくため息を吐いてしまった。

「“仕事”だよ。多分ね」

それを聞くと、銀埜はそうか、と素直に見ることを諦めてくれた。ちゃんと、他人の「仕事」には了承がない限り不可侵、というルールを守っている。

「仕事かあ……。久々だなあ。——て、多分？」

「ああ、多分。なんか、変なメールがきたんだよ。本文がないからなんともいえない」

「ふーん。そうか。珍しいな。お前にその手のメールが来るなんて」
「だな」

確かに、この手のメールは普通届かないはずだ。こんな得体の知

れない、悪戯メールともつかないメールは。僕のメールアドレスには、ちよつとした細工がしてあつて、こついつたメールは送られてこないようにしてある。それにもかかわらず……。

「まあいいや。とにかく仕事、頑張れよ。そんな感じのメールなら、多分俺にも役目が回ってくるだろう。んじゃ、俺はちよつとしなきゃいけないことがあるんで」

そう言い残して銀埜は部屋を出て行つた。

僕はパソコンを操作し、メールボックスを開いた。そして、そこに表示された大量の未読メールに半ばうんざりして、未読メール全消去のコマンドを実行した。

数日前に送られてきた「たすけて」というメール。

——時刻は丁度午後一時。

メールが届く。

僕はそれを見ずに、そのまま消去した。

数日前から、一時間ごとに送られてくるそのメールを消去するのであつた。

第一章 「花咲く折にナニを思つか」 ？

日が昇りきり、夏の強い日差しが、窓から差し込んでいた。
あやずみ

文墨は今の今まで寝ていたソファアから飛び起き、顔に当たる日光を手でさえぎつつ遮光カーテンを閉めた。何気なしに壁にかけてある時計を見る。時刻は、午後三時を過ぎようとしていた。

結構寝てしまっていたらしい。昼食を食べ終え、このソファアに座ってDVDを見ながらうとうととしていたことは、わずかながら記憶にある。誰が消したのか、自分が消したのかは知らないが、今、テレビの電源は消えていた。

ふと、何かを思い出しかけて、思い出すことが出来なかった。

「えーっと、なんだっけ……」

何か用事があった気がするのだが思い出せない。

頭を抱え、思い出そうと考え込んでいると、ノックの音が聞こえた。
「入っていいよ」

誰かは分からなかったが、一応許可した。

文墨は、首だけを動かして入ってきた主を見る

「あれ？ 銀埜ぎんやじゃん。帰ってたんだ」

そこに立ってたのは、紛れも無く西大路銀埜にしおおじだった。この時間帯なら、学校にいるはずだが、おそらくいつもの如く帰ってきたのだろう。

「うん、二時間ほど前にね。玄恵さんは何してたの？ なんだか、妙に静かだったけど」

「——なにそれ。それじゃあ、いつもは私がうるさい人、みたいな言い方じゃん」

西大路は、文墨を呼ぶとき「さん」をつけて呼ぶ。年齢は同い年なのだが、西大路から勝手にそう呼んでいるのだ。ここに来てすぐは、文墨もそのよそよそしさというか、よく分からない感覚に、そう呼ばれることを嫌がっていたが、今ではすっかりなれている。

「ところで、銀埜何しにきたの？」

文墨は、ソファーに座りながら問いかける。

「今日ミナミのお見舞いに行くって行つてただろう？ だけど、詳しい予定は聞いてなかったから、何時からいくかを聞きにきた」

文墨はそこで思い出した。さつきから思い出そうと頑張っていたのはこの事

「それ、それ。なぜか忘れてちゃつて。すっきりした」

「玄恵さんが何か忘れるなんて珍しいな。暑さにでもやられた？」

いつもならあり得ない、とでもいうように、西大路は心配そうに文墨をうかがい見る。文墨はとりあえず、大丈夫と小さく呟く。確かに、なんて大事なことを失念していたのだろう。文墨自身、こういうことは久々だ。
疲れ……だろうか。

「えーっと、面会時間は五時からだから、そうだね……。四時半ぐらいい出ようかな」

「そうか、分かった。でも、その時間帯雨降るかもしれないぞ？ 大雨来るぞ、この空模様じゃ」

この空模様って言つたつて、こんなに日差しが強い晴れ……。文墨は立ち上がり、遮光カーテンを少し開け、外を見る。すると、ちょうど前方。南の空にもくもくと大きく育った入道雲が見えた。あたりの木々の葉の揺れから見て文墨は概ね、風向きを読み取った。確かに、この風の向きからするとそのうち、この付近は土砂降りになるだろう——と言つても夕立程度の短いものはずだ。しかし、雨の中を外に出るのも暑苦しい。何とか、雨の降る時間を避けて出たい。

「でもねえ……。ミナミの面会時間は五時からしか取れなくて、それ以外の時間は絶対無理なんだよね……」

雲の動きからしてもちょうどこを出るくらいの時間に降り始めそうだ。

急に困った表情になつた文墨を見るに見かねた西大路はポケットか

ら携帯電話を取り出した。

「仕方ないから、車の手配をするよ。三人くらいなら問題ないから」
「え、本当？ いいの？」

文墨は輝かんばかりの目で西大路に詰め寄る。西大路はその勢いに、多少後ずさりしながら頷く。

何度も確認をしてくる文墨を、西大路は躲し、携帯で連絡を取りながら部屋を出て行った。

カタカタと、キーをタイプする音だけが部屋に響いている。いつも忙しく鳴いていたセミたちはどこに行ってしまったのだろう。いたらいただうるさいだけなのだが、まったく無いと何故か寂しい。椅子の背にもたれながらため息を吐く。

「はあ、やっぱり警察はブロックが強固^{かた}すぎるなあ。折角、新しい“回路”を作ったのに、無駄骨だったな、これは」

僕は今、警視庁のデータベースにハッキングをしている。我ながらあほなことをしているとは思っている。こんなの見つかったら、どうなるか分かったもんじゃない。——とはいえ、警察の情報が知りたくとも、その方面へのコネがないのだ。だから仕方がない。決めたら、どんな手段を持ってしてもやり遂げる。それが僕の信条。それにしても、さすが警察のトップだけはあって、障壁がなかなか破れない。かれこれ三十分。向こうに気付かれないようにちよこちよことアタックするのは疲れた。もう、汗ダラダラ。

と、クーラーをつけているはずのこの部屋が暑い原因を見つけた。部屋の隅においてあるサーバーが発熱している。熱気が押し寄せる。高さ二メートル近くあるそのサーバーは、冷蔵庫のような専用のクーリングボックスに設置してあるのだが、どうも冷却が間にあっていない。“回路”が強すぎたようだ。

この回路を持つてしても、障壁を突破できないのは不思議でたまらない。

ただのプログラムではないのだ。

「やっぱり、おかしいよなあ」

「何がおかしいんだ？」

いきなりの声に驚き、勢いよく振り向く。

「銀埜か……。お前ノックぐらいしろよ」

「ノックならしたぞ？　でも何の反応もなかったから、入って良いってことだろ？」

いや、その考えはおかしい。だいたい、以前にノックして反応なかったときは作業中だから入るなって言ってたのに。しかし、銀埜はそんなこと覚えていないご様子で。

「で、何しにきたの？」

「そろそろ行くから呼びに来た」

「行くなって、どこに」

「ミナミのお見舞いだよ。なんだ、お前も忘れてたのか？」

銀埜はあきれたような口調で言う。お前「も」ということは、文墨もか。確かに、ミナミのことを忘れていたのは失態——てか、そんな話し聞いてない気がするぞ。銀埜のやつめ、言い忘れてたな。

ふと、部屋が暗くなる。窓から外を見ると、黒々とした雲が太陽を覆い隠していた。ごろごろと、雷まで……。さっきまで晴れていたのに、一雨きそうな感じがした。

心配そうな表情になっていたかは知らないが、銀埜は

「雨のことなら心配しなくてもいいぞ。車を手配した」

「車を手配って、タクシーか？」

「いや、レンタカー」

即答。

「誰が運転すんだよ」

「そりゃ決まってるんだろ。クロエさんだよ」

またもや即答。一般常識だろ、とでもいうような言い方。まったく……なんなんだろう。違和感と言つか、おかしいということに気付かないのか、銀埜は。なにせ、文墨の年齢は十六。しかし、何故

か運転免許をすっかり所持。何故持っているのか数回訊いたこともあるがいつも決まって「そりゃ取得したから持つてるんじゃない。理由なんてないよ。何かおかしい？」いや、おかしいだろ、全てが。いつからこの国は十六から運転可能になった。それに、平然と運転していても、大人びた彼女の顔立ちの所為か、何か言われる事もない。いいかげん捕まって現実を学べ。まったくドイツもコイツも、この家に住んでるやつは社会的感覚がズレてるんだよなあ（ただし僕は含まない）。

「おーい、リ्यूキー、戻ってこーい。どこを迷走してるんだ、お前」

おっと、つい自分の思考の世界に入り込んでしまっていた。

「ごめん、ごめん。で、もう行くのか？」

「おう。車もちゃんと届いてるぞ」

「分かった。じゃあ、準備と言っか、片付けるから、ちょっと先行っててくれ」

銀埜はうなずくと部屋を出て行った。僕もハッキングの後処理を軽く済まし、部屋を後にする。

第一章 「花咲く折にナニを思つか」 ？

案の定、雨は降ってきた。しかも、僕が部屋のある三階から下りてきたとたん。バケツをひっくり返したような土砂降り。もう、なんですか？ 僕は雨男なんですか？

まあ、気を取り直して車を探す事にする。ここから見える範囲に止まっている車はただの一台だけ。ベンツ。なんだ、この高級たかそうな車はっ！

まさか、と思い濡れるのを気にしながら……というか、ずぶ濡れになりながら車に近づきそと中を見る。いた。文墨とその他一名。僕は車を傷つけないように気をつけながら、後部座席に乗った。

「んじゃ、行くよ？」

運転席に座る文墨は僕が座ったことを確認するとアクセルを踏んで――

「って、うわっ！」

急発進、急加速！ 慣性の法則は当たり前のように働き、僕の体はシートに叩きつけられた。

「ちよつ、文――墨っ」

文墨は、僕のことなんかお構い無しに、気持ち良さそうに運転をしている。つうか、この雨の中ワイパー動かしてないんですど、コイツ。

文墨の運転で車に乗るのはなんだかんだで初めてだ。と、いつもの僕が移動する時は歩きか公共交通機関を使うというエコ人間（？）だからだ。車にはあまり乗らない。それにしても、文墨の運転は強引過ぎるというか……ひどい。何故これで免許取れたんだよ。まったく持って、謎だ。

出発して数分。僕たちの乗る車は早速大通りメインストリートで渋滞にハマってし

まった。

ミナミの入院している朱雀病院は、この市で一番大きい総合病院だ。評判もよく、なかなか繁盛しているとか……。そんな朱雀病院は、僕らの住むマンションから歩いて三十分ほどの所にある。車だと多分——十分もかからないだろう。しかし、この付近の道はよく渋滞するので、そうスムーズにはいかない。

いまでも、信号からはるか遠くの場所で立ち往生している。車内に会話は無く、なんだか息が詰まりそうだ。雨が窓を打つ音が、イヤと言うほど耳に響く。

とりあえず、暇で仕方がないので、僕は窓から外を眺めた。歩道をたくさんの人々が歩いている。ちょうど、下校時間なのか小中学生が多い。夏休みを間近にしてこんなに大雨に降られて、彼らの気も沈んでいる事だろう。

傘を差してゆつくりと歩く人の波。

——あれ？

人の波の中の一人の少女に目を奪われた。人ごみの中で一際目立つ。その一人、彼女だけ風景からういている。雨の中、傘も差さずレインコートすら着ていない。白いワンピースを着た長い髪の少女。ずぶ濡れになりながら突っ立っている。——そして、僕を見ている……ような気がした。

「あ、」

少女の姿が、押し寄せる人の波に紛れて見えなくなる。

次、人がいなくなつたときには少女の姿はどこにもなかった。ただ、何故かビニール傘が一本落ちていた。

「なんだ、今の……」

車が少しだけ前へ進む。

「どうしたんだ、隆希」

前の席に座っていた銀埜がシートの隙間から不思議そうにこちらを見ている。

「いや——なんでもないよ」

やがて、車は普通に進み始めた。
一つ、残された傘も雨の飛沫に消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0416w/>

夕空に啼く鳥

2011年11月2日03時15分発行